
蒼天依存症候群。

李兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼天依存症候群。

【Nコード】

N8127X

【作者名】

李兎

【あらすじ】

「弱虫だもん、仕方ないよ」――閉鎖的な彼女は笑うのも泣くのも下手でした。そんな彼女を変えたのは、優しくて愉快的仲間たちでした。◆ 不器用な主人公が騒がしい校舎の片隅で、たくさんの人の手を借りてゆっくり少しずつ、進んでいく物語

「fast」

「fast」

◆ご挨拶

初めまして、李兔と申します！

今まではイナズマイレブンの二次創作を書いていたのですが、最近BSR熱が収まらなくなってきたので、戦国BASARA夢小説へと手を出しました。とりあえずいけめそ&女の子至上主義です。オールキャラバッチ恋です↑

かなり勢いで書いているので、いつ更新しなくなってもおかしくありません。私は飽き症が酷いのです（

でも、お付き合い頂けると嬉しいなあ……（・ω・）

◆注意

↓【戦国BASARA】の夢小説／主人公は女のオリキャラ

↓学パロだけど捏造設定が至る所で発生中なう

↓夢主が普通じゃない（絶賛青春陶酔病的な方向で）

↓キャラ崩壊注意報常時発生中

↓終わりが見えない

↓更新不定期。テストとかでお休みすることもありますです

↓いけめそとたくさん絡むのは作者の願望でsげふんげふん物語上の都合ですが、メインは友情です（と李兔は言い張ってみた！）

↓（この作品は）どちらかと言えば筆頭／武田のオカン／前田の風来坊／日輪の申し子彘肩目かも

↓ゆっきーは癒し系だと信じてる。だ、だから黒幸村は降臨しないもんね！ まあ好きだけど！

↓作者のテンションは常に『L e t ' s p a r t y !』状態

後半悪ふざけでしたが、こんな捨て駒に「Ha！ 付き合ってやるぜ！」というお方はこれからもよろしく願いまry
ではでは、この物語が無事完結することを祈って。

20111022 李兔

「00」 蒼天飛翔

雲一つないあの空が、大好きだった。

突き抜けるような爽快感を覚えさせるそれは、澄み切った表情をそのままに悠然と世界の天井としての役割を果たしている。今この絶景を阻むものは何一つ存在せず、唯一あるとすれば『睡魔』だろう。ふわあ、と大口を開けてだるそうな欠伸を漏らす。そのせいか瞳に薄く涙が滲み、目の前に広がる空が微かに歪んだ。ごしごしと目をこすり、再び歩き出す。ずっと上を向いていたせいか、鈍い痛みが首を走った。

鮮やかな空とは対照的な、味気ない街中を進む。乾いた空気、錆びた人間、穢れた世界。どれもこれも——この空を眺めたこともあってか——それはそれは酷くつまらない存在に思える。現にこの歩き慣れた遊歩道も高校へ進学した当時は随分と彩られた道に感じたが、今ではただの通路としてしか受け取ることができない。学校へ行くために通らなければならぬだけで、それ以上でもそれ以下でも無いのだ。

「……眠い」

再度、体は眠気を訴えてくる。欠伸を噛み殺しながら足を速めた。心なしか空気も冷えてきた気がする。ぞくり、と背中を這うような悪寒が意地悪く身体を震えさせ、咄嗟に自らを抱きしめる。恐怖にも似た、この感覚。——嫌いだ。定期的に襲い来るこの感覚に、どうも慣れることができずにいる。何が原因なんだか、と自嘲気味に自分を責めてみて——そして気付く。

（——ボクは、ひとりぼっち“孤独”なの？）

協調性が無いと数少ない友人に言われたことがある。××さんて、人嫌いなんだねーと軽く受け流されたことも少なくない。少しは愛

想良くしたら？ と母親に指南され、同時に「いつまでも自分の殻に閉じ籠ってんじゃないわよ、あんたがそんなことしてもカッコよくないから」と意味不明な釘を刺されたこともある。

だが、それでもこの性格を本気で変えようとは思わなかった。改革なんぞ必要無いと、そう思っていた。じゃあ何なんだこの感覚は、と自分に訴えてみる。返ってきたのは、

（―――ボクは、ひとりぼっち“孤独”が、怖い？）

長年封じ込めてきた、本音。

自分は誰かの隣を生きる場所としてきた訳では無かった。誰かを自分の隣に縛り付ける真似もしたくなかった。これは自分が望んだことだったのに。

「……ばかばかしい」

不意に寒気は過ぎ去り、残された喪失感に精一杯の抵抗を試みる。群れることが苦手だった、触れ合うことを気持ち悪いと一蹴しがちな自分がいることを認めた、途端あの人もこの人も怖くなった。対人恐怖症なんていう病気でも何でもない。

人間が怖くて、ヒトを愛することに戸惑いを覚えた。――ただ、それだけのコト。

受け入れてしまえばその現実は、大したことではなかった。苛められている訳じゃないし、友達と呼べる存在も数える程しかないが、いることに変わりはない。ただ、何となく寂しかった。それ故抱く寒さを紛らわす為に、自分に見せる白昼夢。なのにそれは、自分の首を絞めていくだけのものだった。

この手は何度も人を掴み、救い上げ、突き飛ばし、拒んだりしてきた。だけど、この胸は虚しいままで。

（だってボクは、ひとを抱きしめたことが無いんだ）

その隙間を、溝を、たった一人で埋めようとしたから。

嗚呼、だからなのか。ボクは今日も、何かと自分を憐れむんだ。

悲劇の主人公気取り、ね。

「……虚しい、なあ」

消え逝くように空虚に溶け込む言葉は、ボクが脳裏で転がした響きとはだいぶ違っていた。モノクロの世界に、ほんの少し、亀裂が走る。

序章／f i n.

「00」 蒼天飛翔（後書き）

シリ阿斯っぽいですが、序章詐欺ですねこれ。

「01」 時の悪戯

「……葵っ！」

——モノクロの乾いた世界に、鮮やかな黄色が描かれた。

名前を呼ばれた少女は、肩口で切り揃えられた漆黒の髪を揺らし、ゆったりと振り向いた。ぼんやりと、焦点の合っていなかった瞳はかすがを捉えた瞬間、微かに喜びの色を浮かべた。薄く弧を描いた唇は、やはり満足そうである。

「かすが、おはよー」

「お前が私より早いなんて……！」

「開口一番それって酷い」

かすかの言葉に苦笑し、困ったように笑う少女——藤浪葵^{ふじなみ あおい}は、せめてもの反抗なのか刺々しい口調で「仮にも病み上がりなのにな」と呟いた。

すると彼女は小さく鼻で笑い、「バカは風邪を引かないからな、久々でくたばっていたんだろう」と言い返す。これにはカチンときたのか、葵は今にでも噛み付きそうな表情を見せていたが「もう、平気なのか？」という彼女らしからぬ気弱な声音に、満足そうに——はたまた面白そうに——僅かに口角を釣り上げた。へーき、と囁くように告げれば——かすがが刹那、喜ばしげに微笑んだのは気のせいでは無いと信じた。

「微熱だったし、寝てたら治ったよ」

「……そ、そうか」

「ボクが休んでる間、寂しかった？」

「ばっ……バカか、お前は！？ 自意識過剰だ！」

憤りの色をそのまま映し出し鋭く吊り上った瞳に、荒げられた言葉。背後には薄らと殺気立ったもののさえ感じられる。が、朱色を帯びたその頬を見てしまうと、その鬼のような形相も愛らしいものだ。「かすが照れてる、可愛いー」と呑気に呟くと、ますます赤くなっていく顔。今にも湯気が出そうな勢いで怒鳴ってくるかすがに、葵はやはり笑い声を押し殺すことができない。

「そ、そう言えばだ、葵」

突然、話を逸らすようなタイミングで言い放たれる言葉。葵としてはもうしばらく、かすがをからかってやりたいところなのだが――彼女の言い辛そうな表情に、口を濁す。整った顔を歪ませるかすがを見れば、何か問題でも起きたのかと不安を煽られる。

「お前が休んでいる間に、予告無しだったんだが」

そんな葵のことなどつゆ知らず。彼女は眉をひそめ、怪訝な顔つきで一拍置くと、

「――席替えがあったんだ」

困ったようにそう告げた。

「01」 時の悪戯（後書き）

三人称で進めていくの苦手なのできついです（汗）
できれば葵視点で進めていきたかったけど、それだと今後の展開上
不便なんだなあ……（´；ω；｀）

「02」 男の存在

「……え？ 席替え？」

課題の追加では無いのか。成績にはあまり関係無いらしくほっとするも、席替えという響きに未だびくびくしてしまう。それも、この非社交的な性格のせいだろう。全く、損な性格だ——自嘲的に心中で呟けば、自分でも虚しくなった。葵は小さく溜息を漏らすと、かすがを見据えぎこちなく笑って見せた。

「隣のヤツの名前、聞きたいか？」

「あー……かすがは？ ボクと近いところ？」

「……前後だが」

「よっしゃ、神様ありがとーっ！」

下駄箱で上履きを取り出しながら、葵は心底嬉しそうに笑う。表情の豊かさに欠ける彼女の、幼さを帯びた珍しい笑顔にかすがもつられ、随分と大人びた微笑を浮かべた。にぱーとした、子供っぽさを残した明るい笑顔。その表情を貼り付けていればもう少し友人は増えるだろう。が、自分を含めた僅かな人間にしか見せずそれも自覚無しときた為、かすがが密かに悩んでいる事に葵は気づいていない。葵曰く、仲良くもないに人間に愛想を振りまく程自分はお人好しではないらしい。

「……ところで、何でそんな浮かない顔なのさ。ボクの隣、そんな危ないヤツなの？」

「あ、いや、別にそういう訳では無いんだが」
「お願いだから不安を煽らないで下さい」

かすがの顔に影が指す。不安そうに、そして不機嫌そうに目を細める葵に、かすがは止めのつもりか、

「……なるべく私もフォローするがな、なるべくだが」
「ボクをいじめないでよ、かすがのバカッ」

しれっと言い放った。

教室の戸が乾いた悲鳴を歌い、生徒たちの騒音にかき消される。数日ぶりの学校だったが、その賑やかさはあまり変わっていないかった。疲れそう、ぼつりと呟いた葵の本音も教室に溶けて消える。

聞けば、葵の席は窓際の最後列らしい。なかなかの特等席に仏頂面だった葵も相好を崩したが、隣が厄介な人間だったと思いだし、すぐに唇を噛みしめた。と、肩をぽんと叩かれる。

「あ、おっはよー！ 葵ちゃん風邪だいじょーぶ？」

「猿飛……？ え、嘘だろ。また隣とか笑えないから」

「えー失礼だな葵ちゃんたら。とりあえずウイルスまき散らさないようにマスクでも付けたら？ 俺様にうつさないでよー」

「猿飛知らないの？ バカは風邪引かないんだよ、自覚したら？」

あ、マスク余ってるからあげるよ。早くその顔隠せば？」

「ホント席離れてよかった」

「お互い様だし」

猿飛佐助——先日まで隣同士だった彼は、葵が唯一まともに話せる男でもある。と言っても最初の会話が会話だった為、決して相性が良い二人ではない。佐助の登場により、更に不機嫌になったのか葵は新たな席に座ると体を伏せた。が、佐助の挑発的な言動に乗せ

られたのか体を起こし、喧嘩が始まる。

「ってうわっ!？ いきなり殴ってくるのは反則じゃない!？」

「……命冥加な男だ、猿飛佐助め」

「え、ちょ、俺様にどんだけ恨みあんの!？」

かすがにも宥められ、葵はしぶしぶ腰を落とす。

がその刹那、佐助の口がにっこりと弧を描いたのを見逃さなかった。途端、悪寒が葵の背筋を駆ける。

「そんな意地悪されると、隣の彼と何かあった時に何もフォローしないからなー」

「——きみまでそれをっ……!」

葵は悔しそうに唇を噛み、佐助を忌々しげに睨み付ける。が彼が怯むはずもなく。にんまりと意地悪い笑みを浮かべながら「溜息吐くと幸せ逃げるよ、ただでさえ少ないんだから口閉じればー?」と言いつつのを、葵は聞こえないふりをした。が、彼女が苛立っているのは、その震えた拳からお見通しである。

「02」 男の存在（後書き）

笑うと笑顔が可愛い娘なんです、本当は。

「03」 彼の冗談

「……おかしいなあ。ニュースの占いでは一位だったのに」

「俺様が見た名前占いだと『あ行』最下位だったけど？」

「ほんと嫌なヤツだ、猿飛」

唇を固く引き締め、相変わらずの仏頂面で机に身を伏せる葵。そのうち疲れてしまったのか、脱力したかようにすーっと力が抜けていった。頬を机に吐け、居心地悪そうに目が伏せられる。黒髪が頬にかかり、ちくちくと肌を刺した。そんな些細な事までもが鬱陶しい。そして不運の波に吞まれている“自分”という人間も嫌だ。

「……猿、占いなんてモン信じてんのかよ」

「えー心外なんですけど。俺様じゃなくて真田の旦那が見てるんだよ」

頭の上で繰り広げられる会話。その様子から新しいヤツが参加してきたとわかった。耳に残る低音ボイスは、意外にも心地よく耳に届く。――がそれよりも佐助の発言がかなり気に掛かる。

え、真田ってそーゆうキャラだったの？ それってかなり可愛くない？ ……と一人脳内で議論を開始する。真田とはあまり接点が無いものの、佐助から彼の武勇伝を聞かされる為、葵も彼の性格などはよく知っていた。団子が好きで武田先生を敬愛していて、初心でうるさくて。佐助が面倒そうに、それでいて母親のような表情で愚痴ってきたことはまだ記憶に新しい。

「ま、龍の旦那はそーゆうキャラじゃないもんね」

「Ha! そんな子供騙し、相手にしてられっかよ!」

英語交じりの楽しそうな声が聞こえる。龍の旦那こと伊達政宗は、だてまさむね文武両道、容姿端麗という神に二物以上を与えられた人間だ。隠された右目にどのような理由があるのかは知らないが、その隻眼さえもカッコいいとの事。葵も彼のことはカッコいい類の人間だと思っ
てはいるが、生憎ミーハー的な部分は持ち合わせていない為、彼という人間をよく知らない。顔が良いだけに女をとつかえひっかえ状態だなんていう噂は何回か耳にしたが、あの顔である性格であるモテっぷりでは当然だろうと大して気にも留めていなかった。

こんな至近距離では初めて見るなあ、などと呑気に考えていたがどうもその隻眼に目を吸い寄せられる。彼の怖さの象徴とも言えるそれは、思っていた以上に光を宿しておらず――ましてその鈍い光は、どこか霧がかっているように感じられた。真意を隠すような、偽りの其れ。押し殺された感情が、外へ出たいと主張する灯。光と対にある、闇の部分。彼も人間だ、コンプレックスの一つや二つはあるのだろう。一人で勝手に結論付ける。と、ずっと眺めていたせいか目が合った。その視線の冷たさにぞっとする。

「Ah、アンタが隣のヤツだっけ?」

あの絶対零度は、気のせいかな?

先程までの冷たさは何処へやら。拍子抜けするほどの柔らかさに、思わず目を見開く。「まあ、よろしくな」という素っ気ない言葉は、社交辞令と呼べる決まり文句だとしても確かに挨拶だった。人と話すのは得意では無いが、その言葉を無視するのは人間的に失礼だ。

「……よ、」

声が、呼吸が。僅かに震えていた。

「……よ、ろしく………」

ほっと胸を撫で下ろす。しばらくは席が隣となるが、無期限という訳ではない。その間、ただじっと大人しくしていれば親衛隊の女たちに目をつけられることも無いし、伊達と自分では互いに興味の欠片も無いのだ。――平和が一番、心内でその言葉を転がしてみるのがどうも響きが不安定だ。自分は何が怖いのだろう、頭をひねってみるも答えは返ってこない。

「Ha! アンタ、おもしれえな。オレと遊んでみねえ?」

好奇心に塗れた隻眼。答えを知っての言葉なのか。

言葉にできない敗北感に苛まれ、悔しさに心を焦がす。このまま普通に返答するのも癪だが、ここは耐えるしかない。小さく息を吐き、楽しそうに光る視線を合わせる。

「……お言葉を返すようですが、」

だが、別に喧嘩を売るつもりは無かったのだ。

ただ――思ったままでのことを、己に従い告げただけで。

「生憎、顔“だけ”の男には微塵の興味も無いので」

だから、猿飛が『葵ちゃん、冗談通じないんだから苛めないであげてよー』と言ってるのは、真面目な表情で呟く葵には届いていなかった。

「03」 彼の冗談（後書き）

変わり者で初心で残念なヒロインですが何か？↑

「04」 女の抵抗

「あはははっ！ 葵ちゃんホント最高！ 龍の旦那全否定を無自覚でやらかすとか！」

「う、るさいっ……黙れ、猿飛」

ツボにハマったのか、笑いが止まらない猿飛を睨み付ける。が、それよりも隣で呆然としている伊達に目がいった。女に関して苦労したことがないのだろう。そして同時に、否定された経験も無い。

——つまり自分は、禁忌^{タブー}を犯してしまったのか？ と凍り始めた頭で悟った。嗚呼、だとすればそれは。

——まずい。……非常に、まずい。

しかし言ってしまったものは取り消せず、過ぎた時間は戻せない。俯き気味の伊達の表情を伺うことはできない。焦りを感じてももう遅いのだ。迫りくる焦燥感と罪悪感に眉を潜めたが、ふいに顔を上げた伊達を気配で感じ、とうとう目を伏せ覚悟を決めた。

「Ha！ アンタ、上等だよ！」

「え、あ、どうも……？」

心底面白そうに瞳を細める伊達の、本当の想いをその隻眼から掬い上げることは無謀だった。怒りを見なかったことにしているのか、はたまた本当に愉しんでいるのか。しばらくその右目を見据え、奥に潜む何かの正体を明かしてやろうと思ったが——生憎、その壁は相当高いらしい。そして彼の年相応の無邪気な笑みを見せつけられると、そんなちっぽけなことはどうでも良いように思えた。

嫌われてないなら、遠目に見られないのなら。それなら何ら問題は無い。お互い無関心で遠くて近くてクラスメートという枠に収められているなら、それは平和な距離と呼べるのだ。

伊達はい、と口角を釣り上げ笑みを描いた。――あ、今の表情は怖くないかも。なんて考えたのは、一体何の気の迷いだったか。ふ、と小さく息が吐かれる。

「よろしくな、葵」

「……な、ななななっ……!?!?」

葵のその名を囁くために。

接点なぞゼロに等しく、まして会話などたった今初めて交わしたような輩に。前からそう呼ばれていたような親しさで。隻眼を見据えることさえできるこの距離で、多くの女子たちが酔いしれた、その声とその表情に。

どう返せばいいのかわからなかった。否、焦りすぎていたから、ただ普通に「こちらこそ」と告げることさえ躊躇われた。がちがちに固まっていく己の体を叱咤しつつも、きよんとする伊達に罪悪感を抱く。ごめん、別に大嫌いとかそーゆーのじゃないんだ――と心のうちで弁解するも伝わっていないのは百も承知だ。

冷や汗が背筋を垂れ、しばし沈黙が垂れ込める。その数秒間の、なんて居心地の悪いことか!

「龍の旦那の為に言っておくけど、葵ちゃんいつもこんな調子だからね。別に嫌ってるとか、怖かった訳じゃないと思うよー」

「Ah……そういう訳か」

意味ありげに、含み笑いを見せる伊達は――妖艶と言う言葉がよく似合っている。にしても、少年のような無邪気さも大人の妖艶さも彼を着飾るアクセサリーの一つとは。二つの面を持ち合わせる輩

は多くはないが、ここまで似合うヤツも少ないだろう。ぎこちなく息を吸いながら、頭の片隅でぼんやりとそう考えた。

「I'm sorry. アンタがこんなに初心うぶだなんて知らなかったんだよ」

だから勘弁してくれ、葵——と名前がやや意味ありげに呟かれ、びくりと肩が震えた。

すうとなぞるように頬の上を何かが滑る。やけにませたその動きが、妙に冷たいその指先が、目の前で怪しく微笑む男のものだと理解した時、——何かが弾けた。

気づけば、弱弱しくも容赦なくその手を振り払っていた。

嗚呼、一瞬でもこの席を喜んだ自分が憎い。窓枠のサイズに切り取られた空の表情は、本当に好きなのだ。だから喜んだことも認めるし隣が誰であろうとまあいいか、と軽く考え受け流したのも事実。けれどこんな仕打ちは——あまりにも、酷いだろう。

「……しゅ、羞恥心を持って！ 高校生の分際でっ！」

震える声で放った言葉は、確かに葵のものだった。

「05」 現の否定（前書き）

タイトルは “『うつつ』の否定” と読めます V

「05」 現の否定

（……頭が痛い）

その原因が風邪でないことはわかりきっていたが、どうしても保健室に逃げてしまいたい葵だった。

聞きなれたチャイムが、のんびりと学校に響く。

ようやく朝のHRから解放され、安堵の溜息が無意識に零れる。何せ担任はあの片倉先生だ。一年の時の今川先生のように話を聞かない訳にはいかない。ぷつつん、と途切れた集中の糸はあまりにも呆気なかった。次は移動教室だったか。教科書とノート、ファイルを取り出すも立ち上がることさえ億劫に思える。ほんの数日寝込んでいただけなのに、自分はいつからそんな軟弱者になったのだと己を叱咤するもあまり効果は無かった。

否、それは病み上がりという状態だけでは無いのだろう。手を動かしながらこっそりと隣を見遣る。――嗚呼、天はボクの味方をしてくれない。

「おい葵、早く移動しねえと遅れるぞ」

「……………」

憎らしい笑みを浮かべる男、伊達の先程の言葉を思い出すと、どうも悩める。密かに顔を歪めながら葵は効率の悪い脳内思考回路を稼働させていた。

『アンタ、真田の親戚か何か?』

——何故だ。何故、羞恥心を持てと勧めただけで真田幸村と同類になるのだ。葵が自身なりに精一杯頭を捻るも、思い当たる節はその台詞しかあらず、しかしそのどこが真田なのかわからないのだ。とりあえずその呼び名はやめてくれと要求しているのだが、「じゃあKittyでOKだな?」と悪戯っぽい表情の伊達に言われ、変な方向に話が進んでしまう為、強く要求を繰り返すことはできない。苗字の呼び捨てで構わないのに、なぜそのように呼ぶのかが元々の疑問だが、女慣れしている男だ。それも策の一つなのだろう。学園内でファンを増やすのは一向に構わないが、自分を巻き込むのはやめてほしい。——などとは、本人の前では絶対に言えないのだが。

「真田とは関わり無いのに。どうして……?」

「いや、一理あるぞ。お前は真田の“アレ”を目の前で見たことが無いだろうからな」

「“アレ”って何……?」

伏し目がちに尋ねてみるが、かすがは嫌そうに眉を潜め首を横に振るだけだった。日頃、その整った顔を崩すことがほとんどないかすががそのような表情をするとは。何か嫌な思い出でもあるのかと考えたが、それなら尚更尋ねづらい、と諦めた。気付けば、伊達や猿飛は真田を連れて教室の出口で騒いでいた。——厄介な輩だ。改めて認識し、また溜息を吐いた。今日だけで何回溜息を吐いただろうか、と考えただけで気分が重くなる。負の連鎖ははまると面倒だ。わかってはいても、それから抜け出すことは出来ない。

「葵、早く行くぞ。私まで遅れるのは御免だ」

かすがに急かされ、のろのろと立ち上がる。

刹那、ちらりと覗いた青空は確かに美しかったのだ。――憎らしいほどに。せめて、この感情と比例してくれていたら、と柄にもなくロマンチックなことを考えたがすぐに頭を振り、葵は教材を抱きかかえ、教室を飛び出していった。

「急げ、ならキティーとでも呼んでやろうか？」

「なっ……かすがあ……！ 気持ち悪いからやめてよ……」

ううつ、と寒気がするのか自分の体を抱く葵。――彼女の一日は長いようでそうでもなく、あっという間に過ぎていった。

「05」 現の否定（後書き）

筆頭がタラシ化してますが、M V設定使用（＝捏造万々歳）なので
そのうち歪みますw

「06」 君の事情

（ボクってやっぱり、絶賛運氣低下中？ マイナス地点方向へぶちぎりで独走なう？）

気付けば茜と桃色が折り重なり、鮮やかな夕焼けが描かれていた空を眺めながら、葵は悲しいかな一人教室で先生より与えられし雑用を黙々とこなしていた。書類の左端をホッチキスで留めていくという単純かつ飽きが激しい仕事である。帰宅部エース、藤浪葵ともあろう人物が……と心内でひっそりと自らを嘲笑し、そして励ます。この学園に入学してからというものの、部活動無所属というか肩書きのせいで幾度も雑用如きに時間を割かれかけたが、持ち前のスルースキルでどうにか避け続けてきた。そのはずだったのだが――、悲しいかな葵の担任は泣く子も黙る鬼教師、『竜の右目』の異名を持った片倉小十郎なのだ。

（畜生、何なんだあの威圧感は！）

あの目にギロリと睨まれては一溜まりも無い。廊下ですれ違い、お前体調はどうなんだと尋ねられたまでは良いものの、それがそのまま先生の細かなお仕事のお手伝いに繋がるとは予想外過ぎてぐうの音も出ない。用事があるので、と断る手段もあったのだが「頼んだぞ」と強制的に押し付けられた書類を負けじと押し返す程、葵の度胸は据わっていなかったのだ。

はあ……と吐き出された溜息は切ない。不意にかなり悲しくなり、けれどそれで胸の中のモヤモヤも目の前の書類も減る訳では無く。

不機嫌な仏頂面のまま、乱暴に書類を綴じた。耳に胼胝^{たじ}ができるほど聞きなれたその音は、かなり鬱陶しい。

「……もう帰りたい、マジで」

綺麗な茜色に染め上げられた空に、黒き影がぽつぽつと浮かぶ。かあかあといった鳴き声が自分を嘲笑うものに聞こえたボクはおかしいのだろうか。遠くを眺めるような目つきで葵は自らを憐れんだ。かしゅん、冷めた機械音が虚しくも教室に響き渡る。

校庭に伸びる影は心なしに長い。そんな影法師がグラウンドで幾つも頭を揺らしており、不気味な気もしてきた。あーもうこんな時間だ、良い子は大人しく家に帰らなきゃならないのに！ とここにいない教師の顔を思い浮かべ、駄々を捏ねるがどうにもならない。葵が身に着けた雑用経験値は、今日だけで飽和状態となった。

ちらりと覗けばサッカーゴール付近で猿飛や真田の姿が見えた。モノクロのボールを夢中で追掛ける影は、まだ幼い子供のように見えなくもない。兄弟のいない葵に姉や兄のいる感覚はわからないが、愚痴に見せかけた家族自慢から垣間見えるそれは、一人っ子の葵には羨ましいものだった。とすれば猿飛は真田の兄か、普段の彼らからそんな事をぼんやりと想像し、いや猿飛のあの横顔はオカンのものだったと思に至る。

「切っても切れない腐れ縁、か」

そう言えば自分には、そう呼べる人間がいなかったと思い出す。葵が入っていた幼稚園の規模はかなり大きかったと記憶しているが、

良かったのは小学生までだ。中学へ進級すると同時にその環境から外れることを余儀なくされ、そこでもこの性格故に苦勞した覚えがある。仕方がなかったのだ、どう考えても住所的に近いのは皆とは違う中学だったのだから。

「ちょっと、……羨ましいよなあ」

ぽつりと紡ぎされた呟きが本音であることは間違いない。

そんなものに憧れている自分を認めたくなかったが、かなり悔しくて堪らないのだが。ここ最近とんとご無沙汰な少女漫画に描かれていたヒロインの幼馴染が羨ましくて、同じクラスの腐れ縁コンビにどさくさに紛れて八つ当たりした記憶もある。——違う、あれは二人が愚痴（に見せかけた幼馴染ならではの自慢）を当時大人しかったボクに延々と語ってきたからだ！ と誰かに弁解してみる。嫌なことを思い出したからか、手付きが雑になってきた。がしゃん、と綴じられた書類はかなりバラバラで。うっわ、これやり直しじゃん！ と必死に針を外す。ちくりと刺された指の腹に鈍い痛みが走った。

あーもう！ と心内で担任を毒づきながらも最後の書類に手を掛けた。校舎内に部活動終了の鐘の音が響く。夕日は既に、地に浸りかけていた。



「え、と……その、ずっと伝えたいことがあって」

職員室に向かう途中だった。早く帰りたい、つか帰らせろと言わんばかりに廊下を激走してきた訳なのだが。

——何故ボクはこうも運が無いんだ！

一年生の教室が並ぶ廊下を走っていたのだが、とある教室の前でその足を止めなければならなかった。ああもう！ こっちは急いでるのに！ と頭は訴えかけてくるものの、体は硬直したままで。何で、と自分に問いただしそして気付く。この声は女の子のもので、確かに震えていて、遠くからでも感じられる初々しさは——他者である自分が居てはいけない場所なのだと、知らしめているようで。

「いきなり手紙で呼び出したりして、すいませんでした……」

しゅんとした女の子の声音。でも何処か上ずったそれは——青春のページを一頁を思い起こさせる。

嗚呼、ボクはどうしてこんな時にここを通っちゃうかなあ。でもここ通らないと職員室に行けないイコール帰れないんですけど……と考えてふと気づく。

（こんな場所でうろうろしてるボクって、盗み聞きしてる人なの……？）

さあっと背筋が凍る。誤解されないよう早く戻らなくちゃ、と自分に言い聞かせ、その場を後にした。

「……いや、別にどーってことねえよ。ンで、オレに何の用だ？」

——後にした、はずだったのだ。

この低いボイスにはどこか聞き覚えがある。いや、つい最近聞いたばかりじゃないか？ と思い至り、先程見た校庭を思い出した。そう言えば野球部に彼の姿は無かったんじゃないか、と。

「くだらねえ話ならお断りだ、you see？」

からかうような声音は、伊達政宗——確かに隣人のものだったのだ。

「06」 君の事情（後書き）

急すぎる展開に定評のある私です。だんだん先が見えなくなってきたんですけどーしまししょう↑

「07」 瞬の遭遇（前書き）

またたきの遭遇と読んで下さい、無理は承知です！↑
描写も雑だし展開も急いできます。ようは今までで一番雑ですr y
閲覧注意です、頭ごっちゃになります。っーか書いてて自分がわからなくなったr y

[07] 瞬の遭遇

壁にぺたりと張り付く。自分が関わっている訳でもないのに、鼓動は速さを増していった。あ、そうかあの女の子告白しようとしてるんだ。頭の中で理解しているのに、体は動いてくれない。この後、どのような展開になるかよくわからないが、盗み聞きは悪いとわかってる。けれど、他人の告白風景なんてそうそう拝めるものではない。要は――興味の欠片から、動けずにいた。それに相手は葵に
関係無くも無いような男。物音さえ立てなければ、問題無いはずだ。

「で？ 話って？ ……早く帰らねえと小十郎に叱られちゃうんだけど」

「あっ……あの……！」

これはもう最後まで聞くつきやない！ だけど『小十郎』って誰！？ とおかしな方向に興奮する葵。一人称が変でも女子度が残念でも、やはり考えは一人の女なのだ。書類を持つ手が震える。告白
って、好きって二文字伝えるだけなのに、こんなに緊張するんだ――と告白模擬体験。

ふと空気が変わる。あ、もしかして、なんて考えた瞬間だった。

「ずっと！ ま、政宗先輩のことが好きでしたっ……！」

この段階で名前呼びなのか……じゃなくて！

おお、これが恋する乙女の勝負所のテンションなのか。自分には告白した経験もされたこともない。それ故、色々なことが新鮮で面白い。――もうこの時点で罪悪感はどうに忘れていた。さて伊達、

なんて返事するの？ と呑気に他人の恋路を愉しむ。あれでも伊達って他にも女いたよなあと思ひ至る。ボクが知ってるくらいなんだから女の子も知ってるよね？ それでも好きなのかな、一途だなあと他人事のように感じた。

「……それで？ 先に言っとくが、オレはアンタの為だけに他の女、切れねえぜ？」

え、ちょ、冷たいし言ってることむちゃくちゃ過ぎだし。まさか本人が先に肯定するとは。女遊びが派手だという噂は本物だったのか、と納得する葵。嗚呼でも、誰とでも付き合うとかそーゆーのじゃないんだろーなと考えた。そんなことしてたら親衛隊の女の子たち全員を相手にしなきゃだし。色男さんも忙しいのか、とぼんやり想像した。あれ、じゃあ今告白してる子も美人さん？

「知ってます、……傍にいられるだけで良いんです」

なんて健気なんだ！ でも男見る目無いよね、と葵は伊達の顔を思い浮かべた。嫌いじゃないし、好きでもない。ぶっちゃけ興味の欠片も無いが、女の敵であることは一目で判断できた。でもこの子はそれでもこいつを好きで、これから好きでいたくて、それで告白するんだ。あー青春だねえ、心の中でひっそりと呟く。まったく青春かぶれもいいとこだ。面白がっている反面、冷たい反応が返ってきた。

あの女の子もバカだよなあ、自分が一番になれないって知ってて諦められないとか。

（でもまあ、面白いもの見れたし、）

鞆と書類を持ち直すと、こっそりと教室の前を過った。刹那、ほ

んの少しだけ見えた二人は、しっかりと抱き合っていた。女の子は伊達の肩に顔を埋めているため背中しか見えないが、伊達の表情は良すぎるくらい見えてしまった。――嘘だろ、これ。女の子と遊べてさぞ幸せだろうと思っていたのに。

（あの表情は何？）

ぞくり、悪寒が背を駆ける。

ほんの一瞬だったのに、その歪んだ瞳の奥はしっかりと脳裏に焼き付けられた。職員室に向かいながら、その記憶を振り払う。こびりついたそれはなかなか剥がれ落ちず、葵はまた顔をしかめた。ただ、忘れられぬその記憶については諦め、ぼんやりと思考を巡らせる。

（……やっぱりボク、あいつのこと“苦手”だ）

話しかけるのも面倒だし、かすがと一緒にしよう。

改めて確認し、職員室の扉を開く。お茶をすする片倉先生に苛立ちを感じたが、たった今先生も仕事が終わったんだよきつと、と自分を宥め足を進める。終わりましたとやや口調に棘を含ませてみたが、その程度のことには関心が無いらしい。普通に礼を言われ、いささか拍子抜けする。

「悪かったな、急に頼んで」

「いえ、片倉先生にはいつもお世話になっているので」

「棒読みで言われても嬉しくねえな」

「やだ、片倉先生って照れ屋ですか？」

「……黙ってとっとと帰りやがれ」

「はーい………ん？」

目の前の教師は呆れたようにそっぽを向く。そう、目の前の教師は――片倉、『小十郎』先生。

「……先生、あの、伊達くんとはどーゆー御関係なん」

「この時間なら部活の奴らも終わってるだろ、病み上がりなんだから早く帰れ！」

「は、はいいいい！」

失礼しました！ と軍隊のような折り目正しさと職員室を飛び出す。うまくはぐらかされた。やっぱり何かあるんだ……と某少年探偵のように考え込みながら歩き出す。でも先生、ちょっと無茶だったよ言葉の遮り方。回想して思い出す。

「もしかして片倉先生、ボクとかすがが一緒に帰れるように図ってくれた……？」

――本調子ではない自分が少しでも安全に帰れるように。

葵はパタリと立ち止まり、くると振り返ると元来た道を駆けだした。職員室の扉をスパーン！ と開くと片倉先生を含め、部屋中の先生が振り向いたのがわかる。

「片倉先生ーっ！」

「てめえ、さっさと帰りやがれ！」

不器用ながらに笑ってみせる。片倉先生が驚いたように目を見開いたのが、葵の視界にちらりと覗いた。

「今年のバレンタイン、期待して貰って結構ですから！」

ではっ！ 颯爽と去っていく葵は、珍しい程に満面の笑みだった。

破顔した葵がにこやかに帰っていくのを見送った小十郎は、はあ、と大きな溜息を吐き、重そうな頭を抱えた。いつも仏頂面で笑顔なんぞ見せたことがない生徒が、ようやく自分に慣れてくれたのは嬉しいことなのだが。それ以前に色々と問題が残っている気がする。けれど、あの不器用な少女の心の拠り所になれるのならば、代価は安い気さえした。

——政宗との関係を訊かれたのは心外だったのだが。

「藤浪……久しぶりに笑ったと思ったら何を……」

「よいではないですか、なつかれているようですし」

「はっはっは！ 面白い生徒ですのう、片倉先生！」

上杉先生と武田先生は樂觀しているが、実際はそうもいかないようだ。無理にはぐらかしてしまった現実を思い出し、どうするものかと小十郎は再度頭を抱えた。

「07」 瞬の遭遇（後書き）

とりあえず一言。片倉先生が大好きだ！（・ω・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8127x/>

蒼天依存症候群。

2011年11月17日17時19分発行